

幼児期後期における自閉症スペクトラム児の遊びの分析

－ プレイセラピー場面における －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
重富 紗希

本研究の目的は第 1 に遊びをカテゴリーに分類し、遊びの出現傾向を明らかにすること、第 2 にごっこ遊びが質的にどのように発達的に変化をするのかを検討すること、第 3 にごっこ遊びからルール遊びへの移行を明らかにすること、第 4 に自閉症スペクトラム児の遊びに関するこだわりについて考察することである。

分析には筆者がプレイセラピーに参加した 1 年 9 か月間のセッション場면을ビデオカメラで撮影したものを逐語的に文字記録としたものを使用した。研究協力児は自閉症スペクトラムと診断された子どもであり、研究対象となった期間の生活年齢は 4 歳 7 ヶ月から 6 歳 4 ヶ月であった。

分析の結果、以下の 4 点が明らかとなった。1 点目は、ふり・見立て遊びが、研究協力児（以降 CH）からふりや見立てを行い、セラピストに対してイメージを共有しようとする姿が見られたことである。2 点目はごっこ遊びに関して、第Ⅰ期、自分を人形に投影して遊ぶ時期、第Ⅱ期、人形を客体にして遊ぶ時期、第Ⅲ期、役割を意識して遊ぶ遊びの 3 つの遊びに分類され、3 つの時期に区分され、質的な変化が明らかとなった。3 点目はルール遊びも A 期、ルール上に勝敗はあるがひきわけにこだわる時期、B 期、ルール上に勝敗があり勝敗をつける時期に区分され、ごっこ遊びの時期区分と検討すると、ごっこ遊びで役割交替ができるようになったり、他者との関係性を意識しながら遊ぶようになる時期とルール遊びの開始される時期が重なることが明らかとなった。4 点目は自閉症スペクトラム児のこだわりは、遊びの質的な変化に伴い、こだわりも非社会的なこだわりから社会的なこだわりへ変化するものであるということが明らかとなった。

以上よりごっこ遊びは質的に変化し、ルール遊びが出現する時期のごっこ遊びには、役割やその遊びでの他者と自分との関係性を意識するという特徴があり、これらの特徴があるからこそ、ルール遊びをするようになったということが明らかとなった。また、自閉症スペクトラム児のこだわり行動は遊びの質的な変化とともに、非社会的なこだわりから社会的なこだわりへ変化していくものだということが示唆された。